

この世に生かされて、その使命とは？

はじめに

私は、昭和29年8月28日北九州市小倉南区の藤井家の第一子として五体満足でこの世に生を受けました。貧乏していたと母から聞いていましたが、遊具やおやつ、ソロバン塾、書道教室と何不自由のない生活をしていました。親は子供の将来に期待していたと思いますが、義務教育を終える前に不慮の事故(私傷)に合い、脊髄の胸椎に損傷を受け下半身不随になってしまいました。

自業自得とは言え、忌まわしい過去の記憶は、未だ脳裏に残っている。それは、昭和41年9月11日(当時12歳)小学校6年の同級生3名の悪ガキが5年生時の夏休みから遊び場になっていた、「えびす山」というボタ山で防空壕を掘っていた時でした。あぐらをかいてスコップを持っていた私の頭上の土砂が崩壊して腰から下が埋没してしまいました。ほんの数秒間の出来事で逃げ出すことも、動くこともできず「アッー足が無い…」とっさに目の前の土砂をかき分け、足を触ってみましたが感覚はなく痛みもなく、ただ時間の経過と共に息苦しくなるのを感じ始めた頃、壕の奥にいた2人が駆けつけて両脇を抱えながら引き抜くように救出してくれました。

壕は、山の中腹にあったため、麓に降ろすことが出来ず、一人が助けを呼びに行き、戸板に乗せられて降ろされた後、救急車のサイレンを耳にしたように思います。

救急車で搬送される中、以前盲腸の手術をした経緯が有る、小倉北区のM病院へ搬送されレントゲン撮影で脊髄の骨折及び内臓破裂では？ 当院では処置しきれないことが分かり、C病院へ搬送されました。

ここでも処置という処置、手術することもなく約6ヶ月間の苦痛に満ちた闘病生活を味わいました。胸椎10・11番の圧迫骨折で動かすこともできず、本来ならば手術し脊髄を金具で固定するところだが、仰向けの状態で骨折した腰下にタオルケットをまるめた固定処置治療でした。

私は、四人兄弟の長兄だったため、長期の看護には祖母が付添ってくれました。病室は6人部屋で患者は大人ばかりで会話もできず、毎日の時間の長さで激痛で泣き止むことがなかったように思います。

入院後、2～3日で麻痺している腰に褥創(床ずれ)ができ、日毎に大きさを増し脊髄が露出してガーゼ交換処置をするたびに悲鳴を上げ、一日に使用する鎮痛剤(モルヒネ注射)は、数回使用していたと母はいう。月日と共に病状も少しずつ落ち着き始めた頃から、動けない腹立たしさが重なり、次第に祖母・両親に悪態をつくようになりました。「何で自分だけがケガをするのか」「何で俺なんか生んだ」また、子供心に「自分の人生は終わった?」…等々と自身を哀れみ悲観し、自暴自棄に陥った闘病生活。祖母や両親は、悪態をつく悪ガキに対して、慈悲の心を持って看病してくれていたなど思いもせず。

半年が経過して病状も固定期に入ったある日母長が来て、「藤井君は生涯車イスの生活になります…」と言う、薄々気付いていたものの他人の口から率直に告知され、子供ながら大変ショックを受けました。退院を考える中、小学6年と言うことで義務教育だけは終了しなければと言う母の願いもあって併設病院はないか？

両親の必死の新たな入院先探しが始まり候補に上がったのが、福岡の「新光園」と北九州市立「足立学園」のどちらも肢体不自由児施設で中学部が併設されていますが、母が足立学園と決めたようです。

私の入園に当たっては、園内で大変な論議があったと後に総婦長より聞かされました。この施設は先天性の障がい児施設で、脊髄損傷の障がい児を扱ったことがない、また訓練や指導の仕方が分からない等々でありましたが、総婦長の後押しで決まり、昭和42年3月C病院のベッドの上で卒業し、同年4月に肢体不自由児施設「足立学園」へ入園と同時に中学部へ編入しました。

この施設は、現総合療育センターの前進で外科的療法及びリハビリテーションの目的で設立され、開設して間がないベッド数50床の時の入園でした。

仲間意識と人間形成

昭和42年4月、母に連れられ足立学園を訪れました。事務手続き終了後、総婦長に連れられ病室へ案内されて我が目を疑う光景が飛び込んできました。子供ながらに驚いたのと同時に「僕はまだ上半身に障がいがないだけ恵まれている」と正直思った瞬間でもありました。

入園する以前のC病院は大人社会の病室であったし、幼少からケガをする以前まで障がい児を眼にする事も、接する事もなかったからです。脳性小児麻痺・脊髄性小児麻痺の園児と同世代の共同生活の始まりであり、同じ障がい児と言うことの仲間意識の始まりでもありました。

1年を経過し、昭和43年頃から続々と同年齢や先輩達の入園が続きましたが、ほとんどの友人はポリオ(脊髄性小児麻痺)で、外科的治療が目的の一時的な入園で、治療後は一般校へ復帰していくのが通例でした。

私自身も半年間寝たきり状態だったので、四肢の関節や筋肉が萎縮していたため、外科的手術を必要として数回繰り返した後、補足具による歩行訓練や褥創じよくそうとの戦い、排泄訓練と自己管理意識の植付けなど思春期を皆など共に過ごし、保母・ケースワーカー・訓練士の先生方に指導を受けながら、術後の痛みや苦痛のリハビリは、将来への希望があるからであり、生きる勇気を与えてくれるのも事実です。

当時の脊髄損傷者の寿命は、良くて3年の命と聞き、自己管理を徹底しない限り、褥創による感染症や尿感染からの腎不全で死亡していたなど、3年と言われた命が、医療の発展だけではなく、この世に生かされた理由が何かしらあるのかもしれない。

同じ釜のメシを食った先輩・後輩達との共同生活の中で、仲間意識が開花する中、思春期には自身で制御できない、抵抗感や反発が存在しました。そのような中「体の不自由な者同士助け合う気持ちがなくてどうする」と一喝される。園児と先生との意見交換後、動ける園児が動けない園児を介助する週番制が取り入れられ、朝の起床から着替え、洗面介助などで互いに理解し合う心が育まれてきたように思います。

学園生活に関しては、限られた環境で同じハンディを持つ者同士の集団生活は居心地は良く、しかしながら退院後の環境は不安でした。1泊2日で帰省した日、散歩に出た際、親子の会話を耳にしました。お母さんの言うことを聞かないとああなるのよと後指を指された記憶は未だに新しく時代背景がそのような差別や偏見を物語っているように思います。

〔当時の友人や恩師の先生方は、障がい者福祉や医療福祉関係で、現在もご活躍中で、退園者や職員で構成される親睦会「むつみの会」も発足し、現在も交流を深めています。〕

社会進出(健常者との共生)

親のスネをかじり手に入れたマイカーでの通勤の始まりです。初日は、朝5時30分の起床と同時に洗面及び着衣の仕度に1時間と通勤ラッシュを避けるため、あえて遠回りの道を通って通勤した記憶があります。

片道1時間程度の時間をかけて、始業8時～5時までの会社へ入社していました。慣れるまでの業務は、顧客の電話受付をして、配車係にその乗車情報を伝達する内容で、常連客の電話の声を頭に記憶すること、並びに配車係りが無線でやり取りする乗務員の声を覚え、記憶するのが特に重要でした。

会社の車両総数は、中型1・小型33台で、無線局を若松のタクシー会社と共有していたため、無線を通して流れてくる乗務員の声数は、50声ぐらいあったのではないかと思います。

数ヶ月を電話受付、乗車日報及び料金確認とタコグラフの交換などをへて、無線係りの担当になりましたが、当社乗務員と他社乗務員の声とが混線する無線環境で、神経を使う業務でした。

近年の乗車システムとは違い、当時は鉄板に乗車・空車の項目を書き、円形の磁石に車番を書き、そのコマを乗務員からの無線の声を聞き取り、空車・実車としてコマを動かし配車して行くのが配車係りの主な業務でした。不慣れな配車対応でトラブルを招きながらの日々で、ある日配車室へ乗務員が怒鳴り込んできてロゲンカになった事も数回経験し、幾度となく悔し涙をトイレで流したし、また、血尿が出たこともありました。

職場環境に関しては、バリアフリーとは縁遠く、配車室の出入り口に5cmほどの段差あり、トイレは、男女兼用の和式便器などで、ドア幅も狭く車いす者の私にとって劣悪な環境下でした。

そのため、失禁対策として、常時着替えを車に積み、アクシデントの時は車内で着替えた経験もあります。

約1年が過ぎた頃だと思いますが、日勤から夜勤へ変更され、1人で電話取りから配車までを担当することになり、昼と深夜の顧客の違いや市街地の顔も違ってくるので、ゼンリンの住宅地図が配車時手放せませんでした。入社から日勤・夜勤と勤務を繰り返す中、乗務員との交流などを通して多くを学んだ就労経験でした。

この会社で勤務する中、次第に友情も生まれ6人ぐらいでグループ組み、その友情たちと特に友情を深めました。夜毎の盛り場通いやドライブ、また、当初抵抗があったものの、勤務終了後に常設の風呂に入浴しながらの将棋や海外旅行など、彼らは、障がいに関係なく、個人としての対等な付き合いをしてくれたのです。本人が思うほど周りの人達は障がいを意識していないと言うことを実感したような気がしました。

エピソードとしては、テーマパークなどへ遊びに行った時、観覧車やジェットコースターに乗ろうと友人の1人がいい、断ると有無を言わず車イスから抱え上げ乗せられたこと、彼らは、同情することよりも、同じ時間、環境を対等に共有して楽しむことを教えられました。

社会人になるまでの、自身は障がい者と言うレッテルを張り、卑屈で哀れな存在で殻に閉じこもっていた気がします。

しかし、唯一健常者と障がい者の格差を感じたのは給与所得であり、職場適応能力は健常者と変わらないのに、ただ身体にハンディーがあるという事で所得格差が大きく違う会社やその社会環境に疑問を持ち始めました。まだまだ自立しているとは言えず、親や兄弟のお荷物には絶対になるまいという気持ちも強くありました。

そのような中、足立学園卒業後、印刷会社に勤務している友人と昭和57年頃からだと思いますが、印刷会社から独立して写真植字業を営んでいた友人もいました。2人とは学園生活で同じ釜のメシを食った同級生であり仲間です。

タクシー会社に勤務しつつ、時間が空けばアルバイトで手伝っていた時に独立の経緯や給与の違いの話題など、彼らも私と同様の気持ちを持っている事が分かり、3人の障がい者同士で起業する事になりました。

競争社会へ進出

昭和59年7月のタクシー会社退職後、私は開業の準備に取り掛かり、残る2人は、以前より場所の選定を終えていた事業所にて創業を始めていました。その後、私に加わり、同年11月に資金を持ち寄っての資本金400万の有限会社を設立し、代表者には、友人の1人が就任した障がい者3名の会社が動きだしました。

法人設立に当たって商号を何にするか、設備機材は?などで議論し、その結果、所在地が小倉北区三郎丸であることから、「足立山の麓で足立、私たちが育った足立学園の足立、自分の足で立とう、自活する」の意味で有限会社足立写植と決定しました。

設備機材は、既存のモリサワ写植機1台と高額の写研写植機2台とカメラ1台をリースで購入し、各自が植字オペレーターから印画紙の現像と版下へ印画紙を張り込む一環の作業を行っていました。当時の業界は、活版からタイプ、タイプから写真植字へ、またその先の電子化へ移行しつつある厳しい業界で、手動機による書籍の編集や商業用チラシの値組みなど、どちらかと言うとチラシをメインとした、極端に納期が短い業務で事業と成っていました。

車イス利用者の就労範囲は狭いため、新規一転デスクワークのできる本業種で活路を見出すとしたものの、淡い期待や胸弾む思いなど吹き飛んでしまう時間と数ヶ月の無報酬が続く中、後に加わった、足立学園の同期生が離職していきました。

その様な環境下、日進月歩で変わり行く印刷業界の電子化に遅れまいと、時は平成に変わった直後リョービの電算写植機の導入を決定し、同時に商号も足立写植から足立電算と改め、新たに従業員を採用するのを機に小倉北区大門へ事業所を移転し事業拡大を図っていきました。

増員と共に、新規採用に当たって、パート3名・障害者職業訓練校の卒業生の中から、下肢・上肢障がい者3名と在宅者(データ入力)を含め総勢12人体制で、最盛期は年商7千5百万を計上したこともありました。健全者が障がい者を雇用する会社が圧倒的に多い社会に於いて、障がい者が障がい者を雇用する事で、障がい者の障がいに対する甘えを許さず「自分の給与は自分で稼ぐ」という意識と社内競争の促進を図りました。

私たちが従業員教育の一環で絶えず言ってきた事は、体を使う仕事では健全者に勝つ事は出来ないが、「電子化で健全者と肩を並べる事ができる」「自分で働いて得た給与で食うメシは旨い」と俗な言い方ですが、OJTの一環として指導教育してきました。

そんな折、リョービが電算写植機導入会社を対象とした、第1回全国組版コンテストが開催され当社も出品作を予備校の数式問題集として出品し、平成3年1月に特別賞、次年度は優秀賞と2年連続の名誉ある賞をいただき、営業ツールとして使用して行きました。

当社は、障がい者が働いているから仕事の受注が得やすいのではなく、技術があるから仕事の受注があるの認識と技術のスキルアップが現在も受け継がれていると思います。

平成5年頃、リョービの電算機では、出力の限界があり、写研電算システムを導入すると共に、全ての周辺機器もCADを含め一新しました。私たちは、業界へのバブル経済の崩壊による不振は、まだまだ先の事だと思い込んでいた時、市の区画整理事業で入居していた社屋が立退きを余儀なくされていました。そのため、思い切って「自社ビル建設を…」とまではいかなくとも、小倉南区曾根に380坪の農地で売出している物件を見つけ、全額銀行借入れて賄い、宅地への転用と社屋はプレハブの50坪の建屋で、新たな出発を切ることになりました。

長時間労働が続く、厳しい写植版下の業務請負いの中で、離職と採用を繰り返す事が相次ぎ、障がい者の職場定着の難しい現実と向き合っていました。日々の業務を進める中で、まさに時代は職人から技術者の時代へ移行して行きました。

設備機材に関しても電算写植からDTPへと流れを替えて行く中、新しい技術者の確保が求められましたが、障がい者の技術者雇用は難しく、障がい者の素人を採用し内部で育成する事になりました。

新規採用の障がい者は、頸椎損傷の2人でしたが、当人達が持ち合わせたハングリー精神や努力と教育が実を結び、1人前の技術者に育ち、成長して行く中で得たものは、「相手の障がいを障がいとせず、むしろ特徴と理解し、責任感を持たせ、障がいを武器にする甘えは許さないこと」でした。そのような私自身の経験から経営者側の理解は勿論、共に働く者同士のちょっとした手助けの必要があれば、障がい者のスキルアップに繋がりと、雇用機会が増すのではないかと実感しています。

また、機器に障がい者をあてがうのではなく、上肢障がいがあっても工夫して、その機器が扱える改良機器を提供できれば、もっと雇用の機会が増やせるだろう。そして、障がい者雇用に伴う各種助成金等も活用すれば雇用の拡大と職場定着は可能となります。

バブル崩壊の影響は、当社も無縁ではなく、しだいに受注量の減少が続き、銀行への返済を考えると、早期の決断を要しました。同業他社が廃業、倒産と続く中、会社存続を第一に考え土地の売却を優先して、その売却益で借入を完済することになりました。

不動産屋の手際良さも重なり売却先が早々決まり、一時しのぎではありますが窮地を脱出しました。

次なる引越し先は、小倉南区葛原で、フォークリフトを販売している会社の奥にサービスフロントがあり、その20坪弱を借りての再々出発ですが、根本的な受注量の落ち込みを解決しなくては成りませんでした。しかしながら長引く印刷不況に早々チャンスは訪れません。そのため、新たに業種を増やし、落ち込んで行く売上に歯止めを掛けようと、障がい福祉(福祉用具・機器の仲介)へ参入して、北九州市指定の福祉用具取扱い業者となり、多業種であることから商号も電算を取り除いて有限会社足立として活動していました。

しかし、負った傷は深く、また厳しい環境の中で意見の食い違いで、一体感が維持できず、平成9年共同経営の友人達と袂を分ける事になり、2人はそれぞれの道を歩み出しました。

私は、共同経営と言っても、代表者が居た期間は、実務及び管理をしていたので、経営者としてのノウハウなど全くありませんでした。何とか成ると言う気持ちで、私を信じ残った従業員達と一致団結し、リストラだけは避けようと新たな増設機器で現受注量を確保しつつ不況からの脱出を待ち続けていました。

IT業種へ参入

世の中はIT革命、インターネットの進展は様々なビジネスチャンス这个机会を公平に与えてくれます。少々後発ですが、当社も何らかの形でインターネットに関わって置くべきと、従業員の理解を得る事から始めましたが、結果として独資にて別法人の立上げを決め、ホームページの制作やIT講座を主な事業とし、また、業界は電子ペーパー時代へ移りつつと言う事もあり、紙の足立・電子の別法人としてシナジー効果を出すためインコムジャパン有限会社を平成12年3月に設立しました。

設立当時、北九州市が進めるITベンチャー育成事業で、北九州テレワークセンターのインキュベーターとして、その施設への入居が可能となりました。ここでは、国が進めるIT講座の業務を教育委員会より受託すると共にWEB案件も他のインキュベーターよりアウトソーシングで請け負っていました。スタッフは男女の2名で業務に付いていましたが、固定となる収入が無く、時と共に収支が取れなくなりました。

右から左に流す業務では、拡大戦略に乏しくベンチャー企業としてオンリーワン商品の開発が必要不可欠と思いました。その頃、障がい福祉団体やボランティア協会の友人や知人と交流する中で、インターネットから発信されるバリアフリー情報は、誰を、或いはどの程度の障がい者を対象として流されているか分からないと言う意見があり、私はそこに着目しました。ネット上では双方向機能を持っておらず、検索をした情報は、個別対象とはなっていないのです。

当社が途方も無い研究開発に掲げた、情報基盤整備事業は、双方向の情報の整備が不可欠と技術者を必要とするため、テレワークセンターに相談し、九州工業大学の情報工学部教授を紹介して貰い、その結果、産学連携研究開発として研究会が動きだし、その後、大学と関係を持つ日本IBMとゼンリンが参加しての「網援自立(インターネットの支援を受けて障がい者が自立する)プロジェクト」へ体制が変わり、平成16年より、ネット上にある画一化されたバリアフリー情報の整備から着手しました。

しかしながら、利用者がバリアフリー情報を得る目的は、外出したいからで、利用する施設にエレベーターはあるか、多目的トイレはあるかなど、安心して外出するための事前情報の入手であるため、私たち研究者は、ナビゲーションシステムの研究開発を先に進める事にしましたが、先立つ巨額な研究費の捻出が目の前の課題としてありました。

経産省・総務省が実施する補助金や助成金事業に応募しましたが、評価は良いものの、事業規模が大きすぎるなどで不採択を繰り返しました。そこで、全体システムの研究開発には、大きな資金が必要ですが、コアとなる経路探索エンジンの研究開発を優先し、平成17年11月に九州工業大学と共同研究開発を実施することになりました。

産学連携研究開発は、長期計画になったため当初の参加機関とは異なりつつも、進展を遂げていたが、当社の本業とする事業の衰退で撤退を余儀なくなれました。インコムジャパンは休眠状態と成りましたが、ナビゲーションの研究開発を進めるため、その事業を足立が受け継ぐ事になりました。